

「Z会の映像」 教材見本

こちらの見本は、実際のテキストから1回分を抜き出したものです。

ご受講いただいた際には、郵送にて、冊子をお届けします。

※実際の教材は、問題冊子と解説冊子に分かれています。

【問題】（演習） ★★

次の文章は、近世初期の文人松永貞徳が晩年に著した、自らが師事した人々の言行を中心とする回想録『戴恩記』の一節で、連歌の師里村紹巴について語った部分である。読んで設問に答えよ。

また、或る会席にて、

出でてぞ宇治の 宿りをば知る

と、浮舟の巻の心を、恋の句の終りにあり。しかも月所にて侍りしに、北野の能札と丸とに「付けよ」とのたまひし時、能札は、⁽¹⁾月の句もはや仕りたり、丸にせよ、とささやかれたまひしかば、

暁の 雲にこもれる 空の月

と付け侍りしを、翌日礼に参りしかば、「昨日の月の句殊勝なり。されど⁽²⁾月は露・涙・水などにこそ宿れ、雲には宿るべからず。その句は作はあれども、⁽³⁾隅へ行かず。かやうの所をよくたしなみてこそ、よき連歌師とはいへ。ただし証歌あるにや」と難じたまひければ、

夏の夜は ⁽⁴⁾まだ宵ながら 明けぬるを 雲のいづこに 月宿るらむ

*恋の句の終りにあり。連歌で、恋をテーマとすべき句が数句続いたその最後の句。
 *月所。月を詠みこむ約束の箇所。月の座。
 *北野の能札。連歌師。北野神社の社僧。
 *丸。自称の代名詞。「まろ」に同じ。
 *哀愍。いづくしみ情けをかけること。

と深養父ふかやぶが歌を引きしかば、「⁽⁵⁾そこつにとがめしよ」と、結句きげん機嫌なほして、その後いよいよ哀愍あいきんありて、少しも晴れがましき会には必ず召されし。

10

問 1 傍線(1)および(3)をわかりやすい現代語に改めよ。

問 2 傍線(2)で、月が露・涙・水に宿るとはどういうことか。一五字以内でわかりやすく説明せよ。

問 3 傍線(4)「まだ宵ながら 明けぬる」とはどのような事実を強調しているのか。一〇字以内で端的に説明せよ。

問 4 傍線(5)で、師紹巴はなぜ、どのような気持ちをこめて「そこつにとがめしよ」と言ったのか。五〇字以内で説明せよ。

〔解答の目安〕

*問2～問4…解答字数には、句読点を含む。

出典：松永貞徳『戴恩記』／北海道大学 01年

現代語訳

また、ある（連歌の）会の席で、

出でてぞ……出かけていって宇治の（女性の）住みかを垣間見する

と、『源氏物語』の「浮舟の巻のことが、恋の句の（数句続いた）最後（の句）にあった。しかも（次は）月を詠み込むべき位置でありましたところ、北野神社の（社僧であった）能札と私とに（里村紹巴師が）「付けなさい」とおっしゃったときに、能札は、「（私は）月の句はすでに詠んだ（から）、（今度は）そなたが付けよ」と耳うちなされたので、（私〔＝貞徳〕が）

暁の……夜明け方の雲に隠れている空の月よ

と付けたのですが、翌日、（紹巴師のもとへ、私が）お礼に参上すると、（師は）「昨日の月の句は立派である。しかし、月は、露・涙・水などには宿るけれども、（歌語の約束ごととして）雲には宿るはずがない。そなたの句は巧みではあるが、細部への心配りが不十分である。そういった点に注意が行き届いてこそ、よい連歌師といえるのだ。とはいうものの、典拠としての先例となる歌はあるのか（、もしあるなら話は別だが）」と批判なされたので、（私が）

夏の夜は……夏の夜はまだ宵のうちと思っているうちに明けてしまったが、いったい雲のどのあたりに月は宿っているのだろうか
と、（清原）深養父の歌を引用したところ、（紹巴師が）「（私は）軽率に非難してしまったことだわい」と（おっしゃって）、結局は（かえって）機嫌を直して、その後はますます（私を）いつくしみ、情けをかけてくださって、少しでも晴れがましい連歌の会には必ず呼んでくださったのだった。

問1 (1) Ⅱ月を盛り込んだ句なら、私はさきほどすでに詠んであります

(3) Ⅱ細部まで心配りが行き届いていない

問2 水の表面に月の姿が映ること。〔14字〕

問3 夏の夜が短いこと。〔9字〕

問4 貞徳の句を答めた自分の、証歌を見抜く力の不足を反省したため、貞徳への高い評価と謝罪の気持ちをこめて。〔50字〕